勤皇歌人　大田垣蓮月

藤原弘道

一

古來京都には幾多の歌人が輩出してゐる。殊に近世の國學が勤皇運動と結付いたので、勤皇の士は京都を背景に、國事に奔走するとゝもに、一面和歌に、その精神を表現したものが多い。勤皇歌人といはれる大田垣蓮月もその一人で、蓮月は才色兼備、今式部と世に謳はれた女性であつた。

蓮月はその自敍傳に、

「ちゝはいなばの國人、大田垣光古といへり。ゆゑありてみやこ東山に住、そのころくわんせい三出生、名誠(のぶ)とよぶ。はゝは早うなくなりて、ちゝにはぐくまれて人となる。」

といひ、又大田垣蓮月履歷によると、

「父は伊勢國藤堂家分家藤堂某、庶女なり、生後十餘日を經て、洛東知恩院家來大田垣伴左衞門輝古養父と成る。生母は誠の生後、僅かにして丹波龜岡藩某に嫁す。」

とあるやうに、寛政三年一月八日、京都賀茂川の西涯三本木に呱々の聲を擧げた。生れて間もなく大田垣家に養女とな

つた。養父光古は知恩院の寺侍を勤めてゐた。大田垣家には他に實子であり、一人息子である仙之助があり、蓮月よりは八歳年長であつたが、享和三年三月二十一歳の時ふとした病でこの世を去つた。光古夫妻の愁嘆の程は察するに餘りあるが、同じ年六月母も遂に不歸の客となつた。されば自敍傳にも、「はゝは早うなくなりて」と實母にも勝る慈愛の母を失つて、人の世の果敢なさを喞つてゐる。

十七歳の冬か十八歳の春かと思はれるが、蓮月は但馬城崎郡の岡天造と養子緣組をした。天造は大田垣家へ入嫁後は望古といつたが、生來の放逸懶惰、朝夕放縱の生活を續けたので、遂に二十五歳の時破鏡の止むなきに至つた。二人の間には女二人男一人の子供があつたが皆夭折した。

「世の中のならひながら子の先だちしほどかなしき事はたとへんかたもなく、わたくしも女二人男一人みな〳〵先だゝし候へども七八歳までにてわかれ申候。いまはやう子にて相ぞくいたし居候。いかばかりなげき候てもかへらぬことはしりながら今におき思ひいだしてはなみだをながしおり申候。ぜひなき事とはよく〳〵しりながらまことにかなしきことに御ざ候。」

これは蓮月が丸太町の菴に同居して、親密な間柄であつた瑞玉尼に、後年送つた消息であるが、その間の事情が知られる。この消息にもあるやうに、文政二年再び養子を迎へることゝなり、彦根藩の家中石川廣二光定の三男重二郎を婿とした。誠子二十九歳、父光古は六十四歳、貞淑な誠子には血を吐く思ひで後夫に見えたに違ひない。それでも淋しい追憶は今は消えて、大田垣家には再び春の日が訪れた。年老いた父も喜んだが、それも束の間、五年の後重二郎は藥に親しむ身となつた。元來重二郎は先夫とは異つた性格であつたが、蒲柳の質で、文政六年六月、父に先立つた。その長逝の前日、誠子は自ら丈なす黑髮を薙り落し、夫に二世の契りを告げたといふことである。父光古も野邊の送りを畢るこ

感ずるところあり髪を剃つた。時に父は六十九歳、誠子は三十三歳であつた。後知恩院門主について剃度式を受け法名父は西心、尼は蓮月と授けられ、出家の身となつて、淨土門の信仰生活に入つた。家督は彦根藩風見平馬の義弟を亡夫の養子として迎へ、伴左衞門古敦と名乘つて相續させ、西心、蓮月は知恩院山内眞葛菴に別居した。

いろも香もおもひ捨たる墨染の袖だにそむるけふのもみぢば

尼の所感はこの歌の通りであつたらう。西心は華頂門主より眞葛菴住職を命ぜられた。かくて蓮月は淨土宗の尼となつたが、眞葛菴に於ける十ヶ年の生活は浮世を捨脫して、念佛讀經の餘暇には只管吟詠に耽つた。

ついで天保三年、蓮月四十二歳の八月、一生の憑みとする父を失つた。世を捨てた尼にも、悲嘆の涙とめどもなく流れ、東山にいづる月かげも、夜ごとにすだく眞葛ヶ原の蟲の音もいたましい感慨を傳ふるのみであつた。

「このちかきところにあらばやとおもへども、山の上にて人の住むべきところにもあらねば、なく〳〵かぐら岡ざきにうつりぬ。」（自敍傳）とて、華頂山中大田垣家墓前に、棲まんとの望みも斷つて岡崎に移つた。この頃から尼は念佛や和歌の道に精進する傍ら埴細工を始め、茶碗急須など陶器製作の趣味生活に樂んだ。もとより自活の道を講じたのではあるが、赤貧洗ふが如き生活であつた。然し些も金錢のことは言はず、少し得れば忽ちこれを提供したといはれ、その高潔さが偲ばれる。

爾後或は大佛のほとり、或は北白川心性寺等と、轉々その居をかへてゐる。行雲流水を伴とした雲水の生活にさも似てゐる。その頃勤皇志士との交遊漸く繁くなつたので、或は幕吏の眼を遁れんがための轉居であつたとも言はれる。いづれにしても屋越屋の蓮月と綽名されるに至つた。蓮月自身も己に對する世評を知つて、

宿替といふことをあまたゝびいたすとて人の笑ひければと題し、

浮雲のこゝかしこにたゞよふも消せぬほごのすさびなりけり

と歌つてゐる。

慶應二年七十六歳の秋、西賀茂神光院に隱棲、そこを晩年十ケ年のかくれがとした。王政復古の大號令も、廢藩置縣のことゞもゝ、この隱棲所で耳にしたことであらう。明治元年十二月知恩院名譽學天大僧正より妙相院光譽淨潔蓮月法尼の法號を賜つた。明治八年十月末より病の床に臥し、十二月に入ると病狀は漸次惡化した。神光院智滿和上は病氣平癒の祈願をなしたが、それに對し、

「御たんせいにをがみ遊ばしいたゞき候て、おかげにてきのふごろよりうすかは一まいぬいだほごらくになり、有がたく存じ奉り候。中略。四五日いぜんとはらくになり申候事おかげありがたく存上奉り候。御禮申上つくしがたく候」

と、瀕死の床で、世を捨てた身に、この思ひがけない恩寵を感謝し、感激の謝意を述べてゐる。これこそ神光院に藏する蓮月の絶筆である。かくて

ねがはくはのちの蓮の花の上にくもらぬ月をみるよしもがな

塵ほごも心にかゝる隈もなし今日越しかぎりの夕月の空

最後の吟詠數首を殘して、十二月十日安らかに往生を遂げ、八十五年の一生を終つた。

一たび棺を蓋ふと哀悼と崇敬の知己翕然として集り、西賀茂の村人は泣く〳〵墓所まで送つたと傳へられてゐる。

蓮月の歌集は明治元年に蓮月式部二女和歌集が、同三年には海入の苅藻集が出版せられ、大正十五年には村上素道氏編纂の蓮月尼全集三冊が出版され、海人の苅藻集の外、捨遺の和歌があり、傳記、消息等が併せ錄せられてゐる。昭和二年には本書が洋綴一冊本の普及版として世に出された。

二

蓮月は幕末から明治の初年に亘る國家多事の時代の人である。安政大獄の志士彈壓の腥風はかへつて天下の志士を激せしめ、平安なるべき京都の町は勤皇の聲、討幕の叫びで騷然たるものがあつた。幕府の暴戾を憤ふる聲は天下の輿論となり、ひとり公家や、水、薩、長等の武士のみに止らず、心ある桑門の緇徒、巾幗の婦人まで勤皇の赤誠を披瀝するの勢となつた。

蓮月は隱れたる勤皇女性で、近世女流歌人の第一人者といふことができる。特別にその名が廣く世に知られたについて、小泉苳三氏は明治文學攷第一卷五號に、第一に作歌技倆の優れてゐること、その上京都といふ土地を生活の背景としたこと、第二には家庭的には不幸ではあつたが、その生涯がロマンチックであつたこと、第三には物質に恬淡でみづから奉ずることうすく、他を惠むこと厚き陰德の美德があつたこと、第四には近藤芳樹が「海人の苅藻」の序に「眉のあたり打けぶりて」と形容してゐるのによつても想像できるやうに人並すぐれた美貌のうちに孤獨の宿命と淸く靜かなあきらめをたゝへてゐた生活が混亂時代の人々の心を强く打つたのであるといつてゐる。實際美貌の上に趣味生活が豐富であつたことによるが、もう一つは單なる歌人でなく、又風流の世捨人でもない、高潔な性格の人であり、女性ではありながら勤皇の精神に燃え維新の鴻圖を補翼した烈女である點にある。されば當時文人墨客、或は勤皇志士の、蓮月を訪ふものは頗る多かつた。賴三樹三郎、梁川星巖、春日潛菴、梅田雲濱、江馬天江、藤井竹外、菊池三溪、天章和尙、與謝野尙綱、富岡鐵齋、野村望東、井手曙覽、一井倭文子、稅所敦子、冷泉爲恭等當代名士にして蓮月と交際せなかつたものは尠なからうといはれてゐる。殊に蓮月と稅所敦子とは單なる歌友達といふのみならず、國學の造詣、勤皇

正義の思想、貞淑の志操並に前半生の經歷が相酷似した當代の閨秀歌人であつた。

さて蓮月と勤皇志士との交渉を多からしめたものは一に富岡鐵齋であらう。鐵齋が蓮月の許に薫陶を受けるやうになつたのは十二歳の頃からであり、當時蓮月は五十八歳の頃であつた。年齡の關係からいつてもそうであるが、蓮月は鐵齋に對し眞に親子も及ばぬ氣遣ひをなしてゐる。蓮月尼全集には鐵齋に宛てたる消息三十五通を記載してゐるが、鐵齋成功の裏には蓮月の訓育の預つて大なるものがあるといはねばならぬ。鐵齋嘗て長崎の小曾根乾堂の門を叩いた時の如き蓮月は精神的にも物質的にも援助を惜まなかつた。勤皇志士の幕吏からねらはれ囚はれの身となるもの漸く多くなるにや、蓮月は鐵齋に輕擧を戒め、災禍の身に及ばぬやう心掛けたのである。鐵齋も亦蓮月を慈母の如く慕つてゐたが、蓮月が岡崎より西賀茂へ移りし折、鐵齋は轆轤や鍋釜などの運搬も手傳つたといはれてゐる。(本田成之博士著　富岡鐵齋)

三

蓮月と梁川星巖とは岡崎時代には近隣であり、且その妻紅蘭女史と趣味相似るところより、兩者の往來繁く、星巖は建仁寺天章和尚の語を以て蓮月の詞藻行實を稱讃してゐる。

記天章和尚語

三十一文字、孰其稱色絲、滿朝賀纓貴、不及一老尼。

更に七絶一首を贈つてゐる。

遲角紋生因望月、象牙花發爲聞雷、如何對此林壑、不吐一閑言來。

蓮月老人之囑　　星巖七十翁孟緯

この詩は星巖遺稿後篇第一にあり、蓮月尼全集に錄するものであるが、勤皇詩人の蓮月觀を知ることが出來る。

蓮月と勤皇志士との交遊が世間に聞えてくると幕吏は蓮月に眼を光らせた。事實蓮月もし男なりせば、必ずや安政大獄にその災が身に及び、幕吏の爲め荒々しくも縄付の浮目をみたかも知れない。たゞ世捨人の尼といふので遁れたのであらう。次の逸話によつてもその身邊の危險であつたことが想像される。岡崎聖護院時代のこと、一夜强盗が蓮月の庵を襲つた。衣類など取り出すに任せ大風呂敷まで出し與へた。その上空腹ならんとて他所から貰つたハッタイ粉をぬる湯で混ぜて食べさせた。翌朝知合の百姓が、蹴上街道に蓮月の名のある大風呂敷を背負つたまゝ血を吐いて死んでゐる男のあることを知らせて來た。往つて見ると前夜の賊である。檢死の結果は蓮月の毒殺と決し數回役所へ喚問されたが、ハッタイ粉の出所については、諸方から貰ひ一向に覺えがないとて事件は有耶無耶に葬られた。恐らく何者かゞハッタイ粉に毒を混ぜ、近所の老婆を使つて蓮月の許へ運ばせ、蓮月を毒殺せんとしたものに相違ない。危いところであつた。（蓮月尼全集並に本朝畫人傳）

四

文久三年八月十九日といへば、秋雨蕭々たるうちに、長藩勢力失墜の結果、三條實美以下七卿が妙法院をあとに都を落ちて長門に向つた日である。其時竹田街道に一行を待受け一葉の短冊に慷慨の情を三十一文字に聯ねて見送つた一老尼があつた。

一かたになびきもあへずいとすゞきみだれゆく世の秋ぞかなしき

いふまでもなく勤皇歌人蓮月であつた。

五

さすが長壽の蓮月は宗祖法然上人の六百年御忌及六百五十年御忌に遇ひ各々歌をしたゝめ淨土門の興隆を詠じてゐる。

圓光大師の六百年の御忌に、

ももとせもむ月の末のいつかこて待しみのりにあふぞうれしき

圓光大師の六百五十回の御忌によめる、

吉水のながれの末のひろごりて四方にみちたる法のたふとさ

或は又佛に仕へる身を述懷しては、

うるはしき佛のくににおもふごち往きてすみなばうれしからまし

はるけしとおもひし法のともしびは心をてらす光りなりけり

蓮月嘗て櫻井の里に赴き、

清き名の世にながれつつたぐひなきやまごころときくの下水

と楠公の精忠を偲び、北野の社に詣でては

神垣のちもとのまつのふかみどりいく世世かけておひさかゆらん

と菅公を鑽仰してゐる。敬神崇佛の念の深かりしを知ることができる。

六

弘化の始から鎖國の夢を覺さんとして海邊波漸く高く、幕府は狼狽し、國論は沸騰して四海騒然、攘夷の聲は喧しかつた。

蓮月は世の中何くれこいひしろいけること、こ題し、

ふりくこも春のあめりか閑かにて世のうるほひにならんこすらん

これが岡崎のほとりに隱栖し埴細工をしてゐる一老尼の歌こ思へやうか、あまりにも卑見であり、時勢を見る眼鋭敏であり、たしかに時代に先んじた考を持つてゐた。

蓮月の愛國的吟詠は一二に止らない。

打つ人も打たるゝ人も心せよ同じ御國の御民ならずや

あだみかたつもまくるも哀れなり同じ御國の人こおもへば

蓮月が西郷隆盛に送つた有名な和歌であるが江戸城授受折衝の一大事にこの隱れた勤皇老尼の歌が秘められてゐたことを忘れることは出來ない。

それだけでない、蓮月もし男子なりせば赫々こ明治維新の一頁を飾つたであらう意氣を示すものがある。

をのこにおはします人々のうらやましければたはぶれに、

弓矢こり太刀さげはきてこん世には君につかふる身こうまれてん

身を容るゝに一寸の地なく、遠く薩摩の海に投じた勤皇僧月照の歌に、

弓矢とる身にしあらねど一すぢに立てし心のするはかはらじ

君國を思ふの情、蓮月と一絲相通ずるものがあり、志士の魂に相觸れるものがある。

更に蓮月は、

身はいやしくとも心の清からんことを思ふ、こて、

かたちこそまがりてみゆれ山賤が心とがまはとぎすましてん

身は浮草の如く水の流れにまかせた淨土門の一尼とはいへ、心は國家社會を思ひ、丹心赤誠、維新の大業を陰に陽に扶翼したる勤皇志士の面目躍如たるものがある。